

「終わった人」を読んで

2/22/2017

北村社会福祉士事務所

代表 北村弘之

この本を紹介された時、「終わった人」の意味は何かと思ったのですが、本の帯に、このように書いてありました。「シニア時代の眼前の問題であり、現役世代にとっても将来逃げられない普遍的なテーマをシリアスに、ユーモラスにそしてリアルに描く」とありました。

まさにシニア時代の私は会社員時代のことが思い浮かび、そこには自分が当てはまることも多々あり、痛切に同感した部分もありました。また自分の会社員時代を反省することもありました。これからシニアを迎える50歳代の会社人間にとっては、「これが本当の現実か!!」と今のうちに考えておかなければならない切実なことと思える本でしょう。

この本の出だしにこうあります。「定年って生前葬だな」

主人公は東大を卒業後、メガバンクに就職。仕事に励み、会社に貢献してきた人間でした。しかし銀行の同期は200名。そのうち残れるのは数名。50歳代前後で、多くの同期は子会社や関連会社に転籍です。この主人公も同様転籍組で、役職名は専務とは言え30名の子会社に移っていました。この子会社を63歳の誕生日に定年になった時に発せられた言葉が「定年って生前葬だな」というわけです。

まだまだ仕事がやりたくてしょうがないのに、会社を去らなくてはならない会社ルール。この時に主人公は「終わった人」だと実感しているのです。明日から何をすることもない、何をしても暮らせばよいのか。この物語では、定年後主人公は毎日やることがないうえ、奥さんから「明日の昼ごはん、いるの?」と毎日のように聞かれ、申し訳ないので外に出かけては本を読んだりしますが、一日が過ぎていくのは遅く、憂鬱になっていくのです。逆に奥さんは、長年の夢であった美容室開店に向けて毎日が楽しくてしょうがないのです。このギャップがまた主人公をさらに悩ましていくのです。

この本を読んで、実は私も似たような人生かと思ったのです。それは会社人間であればあるほど、仕事がないこと、自分の場がないことに、自分の存在感を憂うのです。手帳のスケジュールは、埋まっていないと心配になることもありました。

世間では、人生の目指すものは、仕事のみでなく、自分の楽しみを仕事以外に見出すことが大事であると言われても、目先の仕事のことでやはり仕事中心の生活になっていくのです。定年後の主人公は、人生の適齢期をあとで知るのですが、それは、定年後の64歳になって、ある会社の社長を引き受けることになり、自分を取り戻すことができたと思えたのですが、就任後の1年で顧客が倒産し売掛金の回収ができず倒産したのです。そして残った債務のうち9千万円は主人公が財産を抛出することになり、奥さんからは総スカンを喰い、家庭崩壊寸前となったのです。60歳代の定年はある意味では人生の適齢期かも知れませぬ。

私は思うのです。人生は一回だけなのです。悔いのない自分の人生を歩むことが大切です。家族や友、そして同僚にお世話になりながら過ごしていきたいと。

【参考:定年後語録】私の知り合いの宮本厚士氏の講演より

<p>男(夫)は 「ゆっくりしたい」</p> <ul style="list-style-type: none">・家族を養うために一生懸命に働いてきた・家のことはすべて妻に任せてきた・定年後も全て任せるから、僕の面倒見て下さい。	<p>女(妻)は 「再出発したい」</p> <ul style="list-style-type: none">・家を守り、子育て、親の介護もした。妻の役割を十分に果たした。・今からが私の人生。私も社会に役立ちたい。・あなたは、自分のことを自分でやって下さい。
--	---

